

### トレンド論(7)【投資・経済全般】【編集】

前回から1年2ヶ月も経過してしまいましたが、今回は、久しぶりに「トレンド論」の続きを考えたいと思います。

さて、前回(2007年10月9日のコラム)では、最適トレンドラインの求め方について述べました。今回は、最適トレンドラインの振る舞いについて考えます。

最適トレンドラインは、現在から過去に遡って計算したEERのピーク(極大値、極小値)となる日付と、現在との間で算出される回帰直線から、その標準誤差の2倍だけ下方、あるいは上方に離れた直線として定義されます。

これは、毎週末に公表している日経平均株価のトレンドラインとして、お馴染みだと思います。以前のコラムをご存じない方のために申し上げますと、これらのトレンドラインもしくはチャンネルラインは、上記の定義に基づいて機械的に作成しています。

今、株価が上昇基調にある時、トレンドラインは上向きの直線となり、大抵の場合に株価推移の下方に位置します。

なお、ここではトレンドラインとしていますが、これらは機械的に求まる最適トレンドラインのことを指します。

また、株価推移の上方には、トレンドラインと株価を挟み込むように、チャンネルラインが存在します。株価は、多くの場合、このトレンドラインとチャンネルラインとの間のレンジで推移することになります。

逆に、株価が下落基調にある時は、トレンドラインは株価推移の上方に位置し、下方にはチャンネルラインが位置します。

株価は、やはりトレンドラインとチャンネルラインの間のレンジで推移することになります。

さて、株価が上昇トレンドと同チャンネルの間に推移している分には、その傾向は継続していると考えられます。

すなわち、もしもその株式を買い保有している場合は、保有継続となるでしょう。

しかし、株価が徐々に下落し、遂に上昇トレンドを割り込んでしまった場合は、それまでの上昇トレンドが崩れたと判断して、手仕舞いをするようになります。

実は、株価が下落していく過程において、この上昇トレンド自体の傾きも、徐々に緩やかになっていきます。

すなわち、株価が上昇トレンドを下回るストップ基準は、買い建て時と決済時とは異なる場合があるわけです。

これは、最適トレンドラインが必ず株価の現在値を含むことから生じます。

それが必ず成績を悪化させるという訳ではありませんが、買い建て時の条件が崩れたら直ちに手仕舞いするという原理原則に則るならば、買い建てを行なった時点で、トレンドラインを固定してしまうことが必要となります。

そのためには難しい操作は必要ありません。前述のEERの計算を、買い建て時に降には行わないようにすれば良いだけです。

そうすれば、それに基づいた回帰直線や標準誤差は、その時点で固定されます。その後、株価が下落に転じた場合は、最小限の損失で手仕舞いすることが出来ます。

しかし、株価は下落するだけとは限りません。急騰することだってあります。チャンネルラインを超えて上昇した場合、株価はいずれ再びチャンネルラインを割り込み、更にはトレンドラインを割り込んで手仕舞いとなるでしょう。

その場合、株価のピークからの下落幅は極めて大きくなってしまいます。そのトレード全体として

の損益は十分なプラスになるかもしれませんが、それ以上に大きな機会損失を被ってしまうかもしれません。それはできれば避けたいところです。

トレンドラインを買い建て時で固定してしまうと、そのような場合に対処できません。例えば、そのような場合にはチャンネルラインを再び下回ったら手仕舞いするとか、更に上昇している場合は、チャンネルラインの2倍上方のラインを再度下回ったら手仕舞いするとか、いろいろな対策を考えることもできますが、どれもエレガントではありません。

何よりも、チャンネルラインを再度下回った後に、再び上昇に転じないという保証はありません。チャンネルラインを基準にするということは、トレンドラインを基準にする場合とは異なり、統計的な裏付けを全く持ち得ないのです。

そこで考えられるのは、株価が急騰した場合は、トレンドラインの固定を解除し、新たにトレンドラインを引き直す、という方法です。

これならば、多少は機会損失を低減することができます。しかし、実際に試してみると分かることですが、機会損失の低減効果はそんなに大きくはありません。

株価が急騰してチャンネルラインを大きく超えてくるということは、標準誤差が大きくなることを意味します。

標準誤差が大きくなれば、トレンドラインの位置は相対的に下がってきます。

結局、回帰直線の傾きが増大することによるストップ基準の上昇効果と、標準誤差が増大するためにトレンドラインの位置が低下することによるストップ基準の下落効果が、せめぎ合うことになるわけです。

それでも、トレンドラインを買い建て時で固定しっぱなしにするよりはマシでしょう。ただし、これはあくまで株価が急騰した場合の対処です。

株価がチャンネルラインを超えずに推移している場合は、トレンドラインを買い建て時で固定しておく必要があります。

ちなみに、KFシステムクリエイターでは、最適トレンドラインの意味合いとは若干異なるものの、株価急騰時にはストップ基準ができるだけ株価に追従するよう、工夫しています。

そのため、手仕舞い時点の機会損失を、最小限に留めることができます。

さて、以上では株式を保有することを前提に、手仕舞い条件について考えました。しかし、純粋に研究的な見地から、トレンドラインの推移を捉えることも必要です。

その場合は、直近におけるトレンドラインの推移を見ていくことになります。

上昇中の株価が下落に転じてくると、それに伴ってトレンドラインは傾きを緩やかにしてきます。株価はトレンドラインを下に突き抜けて更に下落を続け、トレンドラインは益々その傾きを緩やかにしていきます。

この時、EERは徐々に小さくなっていき、やがて0になります。その状態が存続するための勢力を表す安定指数もまた、その時0になりますが、もしもその状態でトレンドラインを描画すると、株価の下端付近を支持する水平線になります。

同様に、チャンネルラインは、株価の上端を抑える水平線になります。すなわち、それはそれまでの上昇トレンドが消滅して、ボックストレンド入りをしたことを意味します。

ただし、その状態がどれくらい続くのかは分かりません。その後、すぐに下降トレンドに転じるかもしれません。

しかし、最適トレンドラインを調べることで、上昇トレンドや下降トレンドのみならず、ボックストレンドの下限や上限が特定できるというのは、興味深いことです。

最適トレンドラインは、日々変化します。それは傾きや本数を増やしたり減らしたり、チャンネルラインとの間隔を広げたり狭めたり、トレンドの基点日を進めたり戻したりします。

そのような最適トレンドラインの変化と株価推移とが織り合わさって、様々な示唆を私たちに与えてくれるのです。

ランダムウォークからも、トレンドらしきものは発生します。トレンドに基づいた売買は、偶然性をも克服できるのではないかと信じます。

PS. GatewayマシンのDドライブをフォーマットし、リカバリデータを削除しました。リカバリデータがあることで、Dドライブに置いた設定ファイル(iniファイル等)を書き換えできないという問題が発覚したためです。

これで、ハードディスクからシステム(VISTA)の復元が出来なくなりましたが、それが必要になるような事態が来ないことを祈るのみです。

ちなみに、リカバリデータのない環境は快適です。妙な制約は無いに越したことはありません。

タグ:株トレンドライン チャンネルライン 株価推移 ストップ基準

---

2008-12-18 19:10 nice!(0) コメント(0) トラックバック(0)  
共通テーマ:株